

た。戦前では油田調査・炭田調査・鉱物調査・工業原料鉱物調査などが代表的なもので 戦後は地熱・工業用水・核原料資源・海洋・地震予知など領域の拡大と研究の大型化が特徴となっています。これらのプロジェクトを遂行する上で 多数の近代的機器も導入されてきました。

こうした調査研究業務の流れを追ってみると 大正12年の関東大地震と昭和20年の敗戦が 大きな断絶をなしていることがわかります。事業の拡大と縮小の変転は政治・経済・社会史をそのまま反映しているようです。

現在の標本館も 地質調査所 100年の歴史の上に成り立っていることを どうかお忘れなく。

人間は地球の姿をどのようにとらえてきたか

— 移り変わる地球像 — (第1展示室 地球の歴史)

今井 功 (地質部)

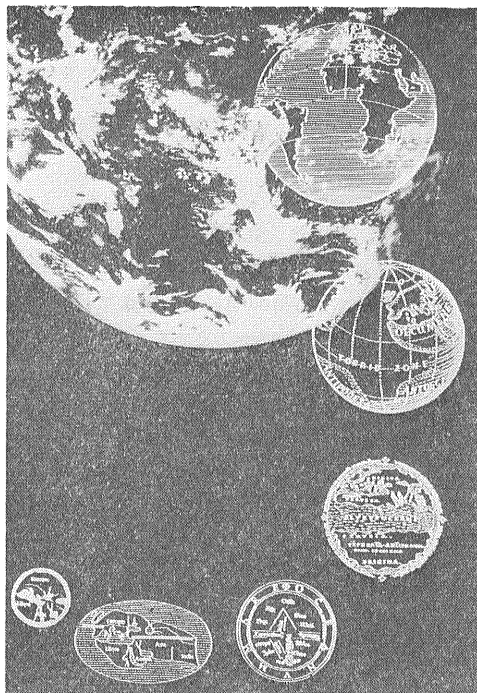
標本館の第1展示室の入口に 世界最古のアミツオーク片麻岩が飾られていて 人気をよんでいます。その左横にある大きな画像には 大小6つの地球が並んでいて これにかぶさるように アポロ17号がとらえた地球の姿が点滅しながら大きく写し出されます(写真)。

ところがこの画像には何の説明もありません。そのためか ちらりと見て通り過ぎる人も多いようです。これを作った目的は 展示室の内容を象徴する「地球」のイメージを来館者に与えることにあったわけで あえて詳しい説明をしませんでした。しかし よく見ればおわかりのように これは古代から現代まで 人々が地球の姿をどのようにとらえてきたか その変遷を示したものです。

左下隅の小さな円は 紀元前550年頃 ミレトス(現在のトルコの西海岸)のヘカタイオスが描いた恐らく世界最初の世界地図です。当時 大地は円板状と考えられていました。オケアノス(大洋)にとりまかれた丸い大陸はヨーロッパ・リビア(現在のアフリカ)・アジア(中東地域)に分けられ 大陸の中に地中海があります。

その右の楕円形のは キレネ(現在のリビア北岸)の学者エラトステネスが紀元前200年代に描いた世界地図で これにはヨーロッパ・アフリカ・アラビア・アジアのほか イギリスが描かれています。インドの東はまだ未知の海洋でした。

その次のコインのような図は 中世のスペインの大司教インドルが描いた世界地図で きわめて模式化して



移り変わる地球像

いますが 大洋に囲まれて丸い大陸があり これが地中海・ドナウ川・ナイル川によってヨーロッパ・アジア・アフリカに分割されています。

中世には人々は地球について様々な想像をめぐらします。次の右上の図は イタリアのマクロビウスが15世紀に描いた世界地図で 東西に伸びる大洋を境に ヨーロッパ・アフリカ・アジアを含む北半球の大陸と これに必敵する大きさの南半球の未知の大陸とが対置されています。

その上の図は 古代・中世の人々が画いた地球像を後世の学者が球面上に投影したもので 地球には4つの大陸が対称的に分布しているという中世の仮説をもとに エラトステネスの世界図のほか3つの仮定大陸を配置しています。

大航海時代から未知の大陸は次々と発見されていきました。世界地図は刻々と現在の地球の姿に近づきます。一番上の図は 大陸移動説の先駆者 フランスのスナイダーが描いた アメリカ大陸からアフリカ大陸を分離させた図(1858)です。有名なウエグナーの大陸移動説が生れる半世紀以上も前のことです。

このように 地球の姿に関する考え方は 古来 いろいろと変化してきました。そして1972年 アポロ17号はついに地球の全貌を写真でとらえました。偉大な科学技術の進歩といえるでしょう。